

青鳳会資料

【難聴と耳鳴りの鍼灸治療】

令和元年5月26日

講師 齋藤俊徳

はじめに

難聴とは聴力検査で、ある一定以上の音が聞こえてないまたは、聞こえにくい状態をいい、これを聴覚障害と呼んでいる。

音の伝導は

耳介で集音⇒外耳道⇒鼓膜⇒耳小骨⇒蝸牛⇒聴神経⇒脳の聴感覚中枢⇒言語中枢

という順序で音は伝わるが、特に内耳の中の音受容器といわれるラセン器（コルチ器）の有毛細胞の働きが重要となる。

難聴は障害の場所によって、伝音性と感音性とその2種類からなる混合性の3種類がある。

◆聴覚のメカニズム

- ①耳介が音波を外耳へと導く。
- ②音波が鼓膜に到達すると前後に振動させる。
- ③鼓膜の中央部にツチ骨が付着して鼓膜とともに振動させる。
このツチ骨の振動がキヌタ骨からブミ骨へ伝わる。
- ④アブミ骨が前後に動くと卵円窓に張った鼓膜を押ししたり引いたりする。
- ⑤卵円窓の振動は蝸牛の外リンパ疎密の圧波を発生させる。
- ⑥外リンパの圧波は前庭階から鼓膜階へ伝わり、最後に正円窓に達し、第二鼓膜を中耳へ膨隆させる。
- ⑦外リンパの圧波は前庭階や鼓膜階の壁に圧をかけることにより前庭膜が前後に振動し、蝸牛管の内リンパに圧波が発生する。
- ⑧内リンパの圧波は基板を振動させ、ラセン器の有毛細胞が蓋膜へ押付けられたり、離れたりにすることにより、蝸牛神経の一次感覚ニューロンの神経インパルスが発生する。

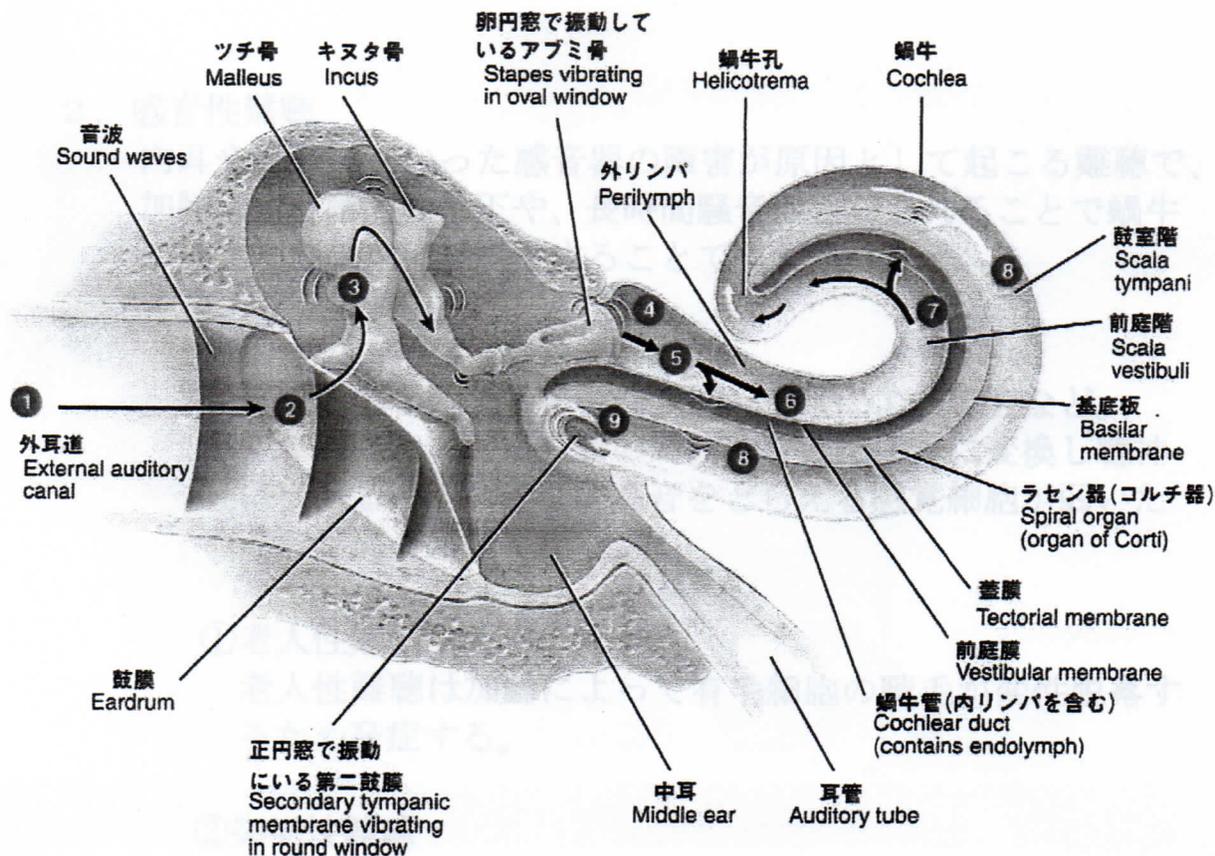


図1 聴覚のメカニズム

◆難聴の種類

1, 伝音性難聴

外耳から中耳にかけての伝音器の障害が原因によって起こる難聴で、中耳炎や鼓膜の損傷などから起こる。

①滲出性中耳炎

中耳の炎症に粘膜からの滲出液が中耳に貯留する。このため音の振動が伝わり難くなる。

この疾患は、急性化膿性中耳炎の繰り返しでおこり低年齢層に多発する。

特徴としては、耳痛がないので難聴であることが、自覚できない。このため、中耳炎を繰り返す子には親は注意を要する。

②慢性化膿性中耳炎

急性中耳炎を繰り返すことで発症する。

症状は、鼓膜に孔が開くため耳小骨まで炎症が及び膿がでる。

2, 感音性難聴

内耳や聴神経といった感音器の障害が原因として起こる難聴で、加齢による聴力の低下や、長時間騒音にさらされることで蝸牛の感覚細胞の一部が脱落することで起こる。

▽原因

長期時間騒音のある職場に勤務、音楽による障害など。感覚細胞は、中耳から音の周波数を電気信号に変換し聴神経に伝える機能で比較的高音をとらえる感覚細胞が弱いいため高音が聞こえ難くなる。

①老人性難聴

老人性難聴は加齢によって有毛細胞の聴毛が変性脱落するため発症する。

②突発性難聴

ある日突発的に難聴になる。ほとんどは片側の耳に起こり、40～50才代に多く発症する。

▽原因

不明だが内耳の血液循環障害やウイルス感染による聴神経の炎症などの説がある。

▽特徴

①発症から2週間以内に適切な治療を受けないと、回復は困難とされている。

②一度治癒すれば再発しない。

③眩暈は、この疾患の1/3位に現れるが、当初の1～3日位でなくなる。

④ストレスや心身過労の影響が大である。

3, 混合性難聴

伝音性と感音性の両方の症状がみられる難聴。

このような感音性の難聴の8～9割は耳鳴りを伴っていると言われ、最も多いのは、老化性変性によるものである。

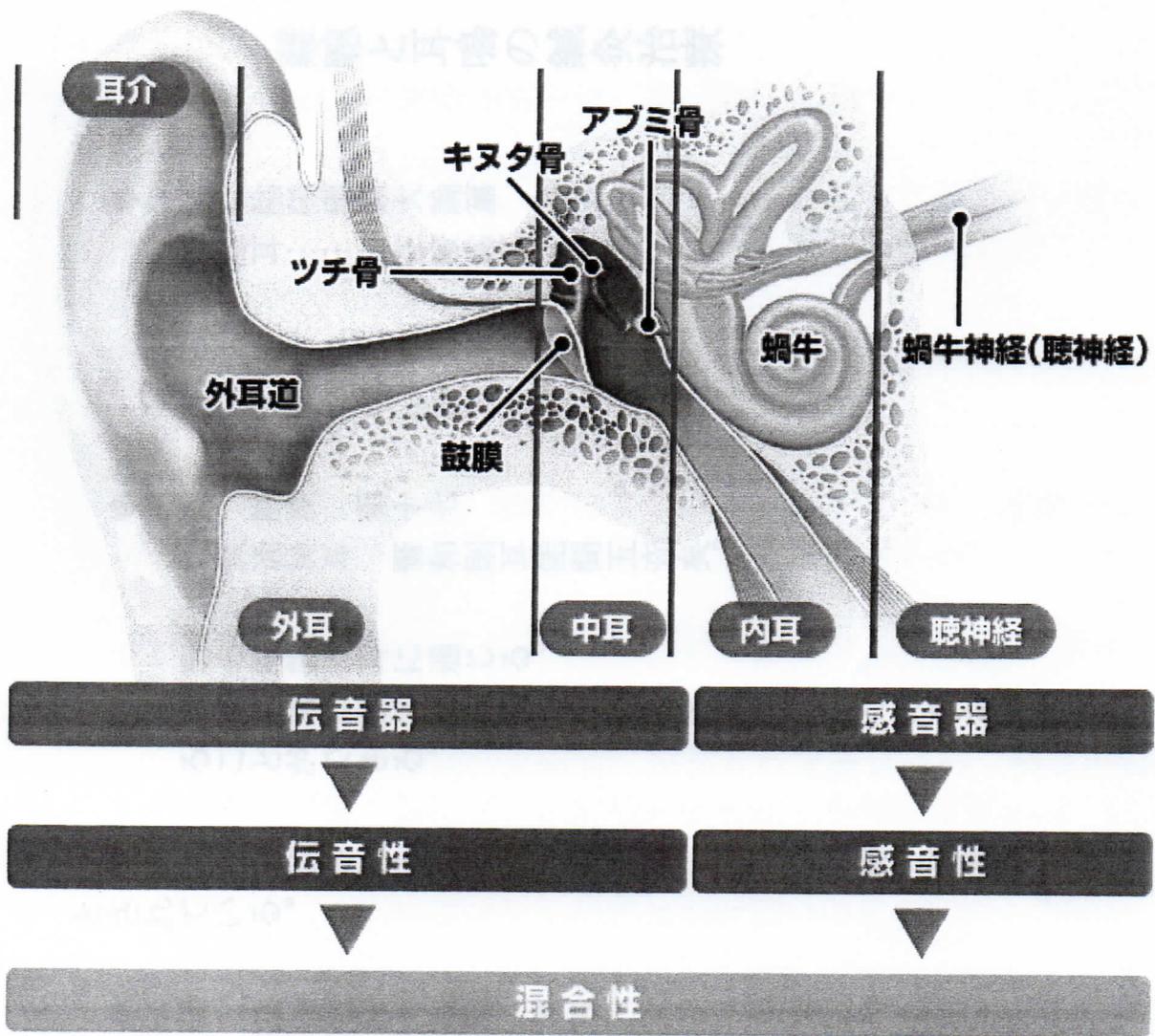


図2 感音性、伝音性難聴の障害部位

難聴と耳鳴の鍼灸治療

聴器と蔵

◆素問 陰陽應象大論篇 第五

腎主耳………在竅爲耳

腎は耳の働きに関係する………

耳は九竅の中に在る

◆靈樞 脉度 第十七

腎氣通於耳 腎和則耳能聞五音矣。

腎の機能は耳に通じる。

腎が正常な正常に機能していると耳は、五つの音を聞き分けることができる。

鍼灸院に来院される患者様の多くは、老人性難聴と耳鳴りが多いとされている。

◆素問 陰陽應象大論篇 第五

年五十體重耳目不聰明矣。

五十歳では、体が重くて、耳は遠くなり、眼は見え難くなる。

老人性難聴や耳鳴を古典では、生命活動の減弱や衰退とし特に、腎精不足と捉えている。

西洋医学でも、聴神経や聴覚細胞の老化変性が原因の一つとして挙げられている。

難聴や耳鳴は、様々な原因で発症する。

精神的影響が強く関係するメニエール病や突発性難聴、そして子供に多い、風邪症候群からの中耳炎による難聴などがある。

耳疾患は次の様な腑の病変と、その経脈の変動によるものがある。

◆素問 熱論篇 第三十一

少陽主膽 其脉循脇絡于耳 故胸痛而耳聾。

少陽経は胆経を主り、その経脈の脇腹が痛み、耳がよく聞こえなくなる。

◆素問 脉解篇 第四十九

所謂耳鳴者 陽氣萬物盛上而躍 故耳鳴也。

所にいう耳鳴とは、陽氣が万物の上に盛んで上下に跳躍する。ゆえに手の太陽小腸経に邪氣が入り、耳鳴がする。

◆靈樞 口問 第二十八

黄帝曰 人之耳中鳴者 何氣使然

岐伯曰 耳者宗脉之所聚也 故胃中空 則宗脉虚 虚則下溜。

脉有所竭者 故耳鳴 補客主人手大指爪甲上與肉交者也。

黄帝がいう。耳鳴はどのようにして起こるのか。

岐伯がいう。

耳には宗脈が集まっている。胃の中が空になると精氣、津液が出来なくなり、精氣がなくなり経脈の働きが弱くなる。そして精氣は胃腸の下部に溜まり、経脈内を流れる精氣が減り、耳に集まる経脈でも精氣が枯渇する。そして、耳の働きが悪くなり、耳鳴がするようになる。

治療は、客主人を補い、手の大指の爪の甲の上で肉と交わる所を取る。

治療穴について

◆靈枢 厥病 第二十四

耳聾無聞取耳中 耳鳴 取耳前動脈。

耳痛不可刺者 耳中有膿。若有乾疔疔 耳無聞也。

耳聾 取手小指次指爪甲上 與肉交者 先取手後取足

耳鳴 取手中指爪甲上 左取右右取左 先取手後取足

耳聾……………手足の少陽經の井穴（関衝と竅陰）

耳鳴……………手足の厥陰經の井穴（中衝と大敦）

耳が聞こえない時は、耳中に入る。

耳鳴は耳の前の動脈が触れる耳中穴を取る。

耳の痛みで刺さないのは、耳の中が化膿している時や乾いた耳垢がある時である。

耳が聞こえない時は、手の薬指の爪の甲の上方で肉が盛り上がっている所に入る。先ず手の薬指に取り、その後に足の第四趾を取る。

耳鳴には、手の中指で爪の甲の上方に入る。左の耳鳴には右手を取り、右の耳鳴には左手を取る。手の方を先に取り、足の方を後に入る。

◆千金要方

上関下関四白百会顛息翳風耳門頷厭天窓陽谿関衝液門中諸
主耳痛鳴聾。